

虹のおおあり

秋来

「はあーあ・・・」

マユカは大きくため息をついた。

長靴で時々水たまりをピシャッと蹴飛ばしながら、
今日もお母さんに手を引かれて、帰り道をトコトコ。

「残念だったね、マユカ。
明日こそ晴れるわよ、きっと！」

楽しみにしていたプールだったのに、
雨が降ってしまい、今日は入れなかったのだ。

雨は上がったけれど、マユカはすっかり下を向いてしまっている。

すると、お母さんが
「マユカ、見てごらん！」

目の前には大きな大きな虹がかかっていた。
マユカは目をまん丸にして、一気に笑顔になった。

虹というのは、一体どこにあるのだろうか。
いつも遠くの山の裏の方から伸びているように見える。

しかし、マユカが見た虹は、隣町から出ているようだったのだ。

「ちょっと行ってくる！！」

とって長靴のまま走り出した。

隣町と言っても、お母さんとよく行くので、マユカにとってはよく知った道だった。

途中で、駄菓子屋のおばさんが

「マユちゃん、そんなに慌てて何処いくの？」と聞くと、

「あれ！！」と言って虹を指さし、走り出す。

しばらくすると、花屋のお兄さんが

「マユちゃん、晴れて良かったね。どこか遊びに行くのかな？」と聞くと、

「あれ！！」と言って、虹を指さす。

すると虹は薄くなってきていて、マユカはまた慌てて走り出す。

今度は、時計屋のおじいさんが

「マユカさん、今日はとっても急いで、どうしたの？」と聞くと

「あれ！！」と言って、虹を指さす。

「・・・ん？何かあるのかい？」

おじいさんにはもう見えないぐらい、虹の姿は消えていた。

でも、そこには赤い夕陽の混ざった青空が広がっていた。

何色とも言えないその空に、マユカはまた目をまん丸にして笑顔になった。

「マユカさん、一人できたのかい？」

ふと、おじいさんに聞かれる、マユカは胸がそわそわした。

あたりをキョロキョロすると、マユカが走ってきた道の向こうから、お母さんが走ってきた。

お母さんはマユカに負けないぐらいの笑顔だった。

「凄いわね！ここ、虹のふもとよ！」

どうやら、虹に近すぎて見えていないようだ。

2人はまた手を繋いで、トコトコ歩きはじめた。

でも今は、マユカは時々空を見上げている。

ふと目の前に一輪のガーベラが差し出された。

さっきの花屋のお兄さんだ。

「ありがとう」

ニコッと笑い、また歩き始めた。

家に着いた頃、虹はすっかり消えてしまっていたけれど、マユカの心は一輪どころか花畑にいるような気分だった。

「明日はプール入れるといいね」

「うん！」

マユカは元気良く頷いた。